

2026 年 4 月 24 日

「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」

●ヨハネ 20：29

これは、ご復活後 8 日経った時、イエスがトマスに言われた言葉です。イエスのご復活後、トマスは、他の弟子たちが「わたしたちは主を見た」（25 節）と言ったのに対し、「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない」（同節）と言いました。このくだりを読む度にふり返る、若かりし日の思い出があります。

私がまだ 16 歳だった頃、ある時、宗教担当の先生に尋ねたことがあります。「神がいると言うならば、何故、神様は今、私たちに姿を見せないのですか？聖書を読んだり、みんな祈ったりするのも良いとは思いますが、神様が直接私たちに姿を現してくれる方が、簡単に、しかもはっきりとわかるのではないのでしょうか」という意味のことを、若いその先生に尋ねたのです。そうすれば翌週、その先生は書き言葉で私に返事をくださいました。一言一句はともかくとして、はっきりと憶えている箇所があります。それは、「ある時、何万人の人がいる球場やドームの真ん中に神が降りてきて、『私はここにいるぞ』と言われれば、もう明確に見えるので、『そうか、わかった！』を思えるかも知れないが、それはもはや信じるとは言えないよね。それではつまらないよね。神様は信じてほしいと人間に願われている…」。

確か、このような内容でした。私はよくわかったとは言えないモヤモヤとした気持ちでした。むしろ、なんだ、もっとはっきりとわかるように説明してほしいな、と内心想っていたのだと思います。

大人になった今、思春期のモヤモヤの気持ちがスッキリ晴れ渡っているというわけにはいかないにしても、それでも時を経て、「はっきりと見て理解すること」と、「見えないものを確信すること」の違いが、少しずつわかってきたように思います。

はっきりと見て理解することばかりでこの世界が埋め尽くされているならば、人は祈ることや待つこと、望みをもつことや意味を見つけようとするのを、止めてしまうかも知れません。目には見えない、明白には理解できないところにこそ、真理を探し、信じて願う。そんな瞬間、見たいと思っているその神様のお姿に一步近づくのかも知れません。

イエスは、トマスに特別な宿題を出されました。「信じる者」になれ、という。私たちにもその宿題は出されているのだらうと思えてきます。